

# 飲泉文化とスパカップ

日本クワオルト研究所 浦川豊彦

## 飲泉の歴史

人類が地中から渾々と湧き出す温泉に畏敬の念をいだきながら、積極的に利活用することが最初の記録として残っているのは、古代ギリシャとその文化を受け継いだ古代ローマ帝国である。

その温泉水（鉱泉水）を飲用することを特に飲泉と呼び、入浴と同時に始まったと思われる。ただし、入浴と違って、飲泉の場合、源泉そのものが直接体内に取り込まれることから、分析技術がない時代でも、経験的に健康増進に有用な源泉と重金属やヒ素など有害物質を含んだ源泉とを区別していたとも考えられる。

ヨーロッパにおける飲泉文化は、中世になって温泉入浴と共に一端ほとんど途絶えたが、トルコなど中東のイスラム圏で生き続け、十字軍の遠征で浸かる温泉と共に飲泉が復活した。

イタリア、フランスでも飲泉が行われてきたが、チェコを中心とする一帯では成熟した飲泉文化が花開き、温泉地の街づくりにも洒落た飲泉所が主要な位置を占める。

日本でも古来より、各地の温泉で自然発生的に飲泉が行われてきた。持統天皇の御代に飲泉によって多くの病者を治療したという記述が、日本書紀に書かれているという。

現在、飲泉のできる温泉地と温浴施設は全国300ヶ所ほどあるが、中でも「胃腸の名湯」四万温泉、炭酸泉の湯屋下島温泉・肘折温泉・長湯温泉、鹿教湯温泉、別府温泉、黒川温泉、妙見温泉などが有名である。

日本温泉医学の父と称されるエルヴィン・フォン・ベルツ著「日本鉱泉論」（1880年出版）には、飲泉の適応症や飲泉量、飲泉施設などについて詳細な記述があるという。

しかし、飲泉は広く普及してこなかった。その原因の一つは、飲泉可能な源泉は少数派なのだ。と言うのは飲泉には、通常の源泉分析の他余計に、ヒ素、重金属などの有害物質の検査をしたうえで、各都道府県が判断する飲用許可が必要である。

第二に、健康保険制度が適応されていないため、医師の指導がない民間療法になっていることである。これらの温泉地では飲泉所が設けられているが、衛生面で問題のある柄杓やコップが無造作に置かれている程度で、特段の飲泉指導もない。それゆえ飲み方も自己流で、時間帯や量も気にかけず、一気に飲むのが当たり前だと広く誤解されている。また、泉質と禁忌症（高血圧、腎臓病、甲状腺機能亢進症〔バセドウ病〕、下痢など）も認知されていない。

## ミネラルウォーターの登場

温泉地に於ける飲泉のほか、形を変えた飲泉文化として今日まで継承されているのは、広い意味で、ボトリングによるミネラルウォーターである。

飲泉で効能が認められた源泉は、はじめは陶器の容器に詰められて運ばれたが、16世紀にはガラス瓶へのボトリングが始まり、17世紀には薬局で販売されている。1892年の王冠の発明でガラス瓶のリユースが本格化し、1973年のペットボトルの導入により爆発的に加速された。

殺菌が法的に義務づけられていないヨーロッパ産のミネラルウォーターの中には、EUの温泉成分基準（日本の基準と同等）を満たすものが多いうえ、EU基準では天然の炭酸ガスの添加は例外的に認められているため、ガス入りミネラルウォーターの比率が高い。その多くは硬水のため、ミネラル分に富むミネラルウォーターは「飲む野菜」とも称されている。一人平均の年間消費量がイタリアに次いで最大で172ℓのドイツでは約8割がガス入りであり、旧東欧諸国ではガス入りの割合が多い。

## 飲泉の効能

天然温泉と称する温浴施設において、源泉分析書に表記されている源泉と浴槽の湯が同一であることは、多くの場合例外的である。源泉は湯温の低下や空気に触れ直ぐに酸化され濁り、沈殿を生じたり、極端な場合、遊離炭酸ガスのように加温過程でほとんどが抜け去ってしまっている。湧出量が少なかったり、湯温が高ければ、加水されることもある。日本の大型温泉施設の大半は、浴槽容量と湧出量のアンバランスで、源泉かけ流しではなく循環式を採用している。そのため、外国人が見ても分かるような飲泉可・不可の全国共通ピクトグラムの設定が望まれる。

地上に湧出ばかりの源泉は、ほとんどが無色透明の還元泉であり、活性酸素を除去する能力が高い。加えてそれを飲泉した場合、含有物がイオン化して存在することで、腸から効率良く吸収される。源泉その物を丸ごと体感できるのは飲泉なのである。

加えて、比較的長時間の入浴がメインな日本の場合、脱水予防のうえからも、入浴しながらの飲泉は、外からと内からの両方で温泉の効能を享受できる意味で、より効果的であろう。

また、金気=鉄を含む鉄泉のように飲みづらい泉質には、日本なら温泉煎餅、チェコのスパワッフルのような『お茶請け』の採用も考えられる。

## 飲泉文化と飲泉カップ（スパカップ）

飲泉文化は旧東欧圏のチェコを中心とする温泉地で最も成熟しており、今でも「浸かる」温泉より「飲む」温泉が主流である。

中でも、「飲んで効き長湯して利く長湯のお湯は心臓胃腸に血の薬」の短歌で賞賛し、高濃度高温炭酸泉で有名な大分県長湯温泉の医学的価値を見いだした九州大学温泉研究所の松尾武幸教授が留学して温泉治療法を学んだ先は、当時ドイツ領だったカルルスバート、現在ドイツ国境にほど近いチェコのカルロヴィ・ヴァリ（『カルルの噴泉』の意）である。今も近くのマリエンバート（マリアーンスケー・ラーズネ『マリア温泉』の意）と共にヨーロッパにおける飲泉治療の中心的存在である。

そこでは、何百種類もの型と絵柄のバリエーションがある飲泉専用カップ（スパカップ）（チェコ語ではlázeňský pohárek ラーゼンスキー・ポハーレック『温泉用コップ』の意：500～1,000円程度）を用い、整備された飲泉場で、空腹時の食前2～1時間の間に、健康保険制度下の温泉医に処方された量（100～500ml）を散歩しながら、もしくは座って、10～20分間かけてチビチビ飲む（英語ではsip「すする」と表現）というスタイルの飲泉文化が今も健在である。

そのために、大きく豪華な飲泉所、チェコではコロネードcolonnade（コロナーダ）が何ヶ所も街中に建設されてきた。大勢の観光客・療養客が街を散策するため、街づくりが飲泉をベースに行われ、街なかには人々で賑わう。日本の温泉地で多く見られる囲い込み旅館・ホテルから客が一步も外に出ないのとは対照的である。

スパカップには、ガラス製、プラスチック製、金属製などがあるが、そこでは陶磁器、特に1,300℃の高温で焼かれ、薄くて軽量かつ丈夫な磁器製が主役である。なぜならカルロヴィ・ヴァリのある西ボヘミア地方は硬質磁器の原料となる長石（カオリン）の主要な生産地であり、マイセンなどの磁器産地ほどは有名ではないものの、ボヘミア磁器の産地でもあるからだ。

歩きながら飲泉するため、その形状は独特である。容器の底からストロー状の取っ手が出て、容器全体が左右から潰されて扁平した基本形をしている。これは持ち歩いても溢れにくいというえ、最高73℃の熱い源泉をストロー部分で程良く冷やすことができるという機能に特化した形状なのである。

飲泉をしている人々のなかには、持ち歩く煩わしさからか、ネック・ストラップで首からスパカップをぶら下げている人もいる。良いアイデアである。

この複雑な形状の磁器スパカップの製法は、日本では排泥鑄込と呼ばれ、金型を鑄型に作った石膏型にミルク状にした生地を流し込み、石膏が水分を吸収して厚みを増す時、余計な生地を排出する技法である。急須の製造法とほぼ同じである。当然だが、陶磁器の特徴として、それ自体に賞味期限などない。割れない限りは、半永久的に存在できる。



飲泉しながら散歩する人々（カルロヴィ・ヴァリにて）



スパカップを売るスタンド（カルロヴィ・ヴァリにて）



豪華なコロナーダと飲泉所（マリアーンスケ・ラーズネにて）

### 波佐見焼スパカップの産直システム

日本にヨーロッパの合理的な飲泉文化を根付かせるしかけの一つは、多種多様なスパカップの普及にあると思う。過去幾つかの温泉地で、磁器製スパカップは、記念品としての特注や個数限定の販売が単発的に行われてきたが、恒久的な製造・流通システムがないために、普及に至らなかった。そこで、今回全国から発注・納品できるシステムを構築する必要性を痛感し、製造してくれそうな磁器産地として波佐見焼に注目した。

有田（佐賀鍋島藩）、伊万里（同）、波佐見（大村藩）を中心とする肥前一帯の磁器生産は、秀吉の治世に来た／徴用された朝鮮出身の陶工と、陶石の発見に始まり約400年の歴史がある。幸運にも、17世紀後半に明から清への政権交代の動乱で中国磁器の対外貿易が実質的に禁止されたため、その代替品として肥前磁器は、東南アジア方面から遠くはヨーロッパへの輸出が大きく促進され、質的に洗練された。この時代既に、高級品は色絵の有田諸窯、日用品は波佐見、三川内、嬉野の諸窯と棲み分けされていた。

17世紀末清朝が中国磁器の輸出を再開したことで、肥前磁器の海外輸出は打撃を受ける。このことが、既に分業化して安価な日用品を量産できるようになっていた波佐見諸窯が、国内向け量産体制へと大きく舵を切る契機となった。

折しも1700年前後は、国内の流通ネットワークも整備され、それまで一般庶民には高嶺の花であった磁器は「くらわんか碗」（庶民向け波佐見焼磁器製品、当時淀川沿いの舟に水上物売りの小舟が近づき「飯くらわんか、酒くらわんか」の呼び声に由来）と呼ばれ、庶民の食器となった。

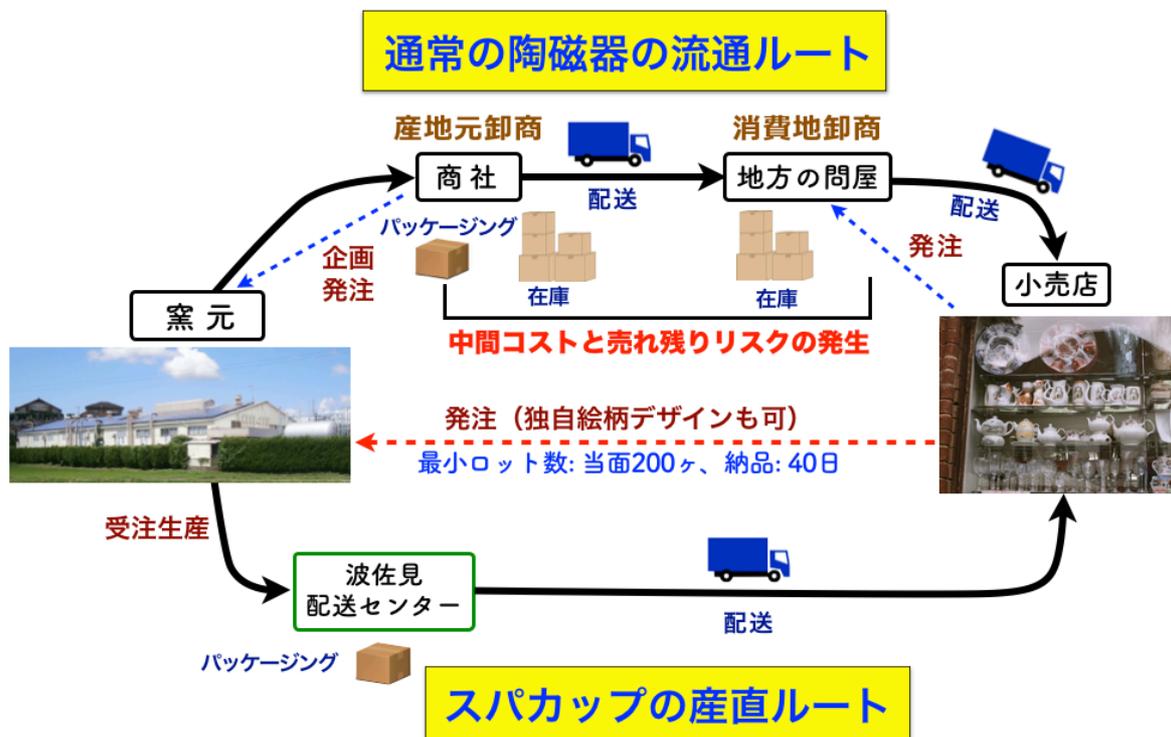
「用の美」（民藝運動を起こした柳宗悦 [やなぎむねよし] の言）と称される簡素で力強い絵付けで安価な波佐見焼は江戸時代中期より、全国の日用磁器市場をリードした。天保年間（1830～1844年）には全長170mを筆頭に160m以下100mを超える巨大登窯が8基も存在し、当時世界最大級の窯業地であったことから裏付けられる。

対外輸出は完全に停止したわけではなく、江戸中期から明治期まで、酒や醤油を入れるコンプラ瓶は継続的に製造され、ヨーロッパにまで渡っている。戦後は、設備の近代化と技術革新で生産性を上げ、高度経済成長と相まって昭和55年（1980年）にピークを迎えた。

しかし波佐見焼は、佐賀藩の伊万里港から出荷されたために「イマリ」と総称され、波佐見の産地名は消えてしまい、今に至る全国的な知名度・認知度の低さに繋がっている。

現代の波佐見焼には、柿右衛門、今右衛門のような作家もの（芸術品・美術品）はなく、日用磁器の量産品として伝統と業を引き継いでいるが、全国的な陶磁器の需要の低迷と安価な外国製品が流通するなかで売上額がピーク時の1/3に落ち込んでいる。デザイナーとのコラボや現代生活に実用的な新商品の開発を進め、他の陶磁器生産地と同様、地域ブランドの確立に向け試行錯誤している。

## スパカップの製造・流通・販売体制



今回の国産磁器製スパカップの産直量産体制に賛同して手を挙げてくれたのは、老舗の窯元、(株)一龍陶苑の一瀬龍宏若社長と陶磁器デザイナーの松尾賢二KEN商品研究所代表で

ある。浦川がサンプルとしてチェコとポーランドから持ち帰ったスパカップは、兩人には初めて見る独特の形状をした陶磁器であったが、飲泉文化の普及と言う目的に理解を示し、新規ニッチ市場への製品開発・製造に快く賛同してくれた。

一般的に、陶磁器の量産品の商品開発・流通は、商社（産地元卸商）が担い、地方の問屋（消費地卸商）を經由して小売業等に納品され、消費者に届けられる。この通常のルートでは、中間コストと在庫のリスクが発生し、小売価格に転嫁される。消費者から製造元（窯元）への直接的なフィードバックもほとんどない。スパカップのように、飲泉可能な温泉地・温泉施設での販売に限定される比較的小ロットの製品では、従来の流通ルートに固執すれば販売価格が高止まり、結局普及に繋がらない。

そこで新たに、地方の小売業、温泉旅館組合などが直接製造元に発注をかけ、受注分を生産する産直体制を作ることにした。この場合、発注から生産まで1ヶ月前後がかかるが、中間マージンと在庫のリスクを最小限にできる。また利点として、末端の消費者からの直接の要望（ご当地絵柄・デザイン）も小売り経由で直接窯元に伝えられる。結果として消費者には、多様かつより求め易い価格で陶器スパカップを提供できる。

スパカップは形と絵柄の多様性を持たせることができる魅力的な製品であり、飲泉に特化した物であるばかりでなく、思い出のお土産としての魅力も持つ。ネットを検索すれば、陶磁器スパカップは自宅へ持ち帰られ、置物として、一輪挿しとして二次活用されているのが分かる。さらに自宅でミネラルに富むミネラルウォーターをチビチビ飲む「自宅飲泉」だって、新しい用途として考えられる。

この度、大小2つの波佐見焼スパカップの量産体制ができあがったことで、個々人がこだわりのマイ・スパカップを持って飲泉所一帯を散歩する、そういう温泉地の風景が日本でも一般化することを願ってやまない。（2016.11.24）



大小2種類の波佐見焼スパカップ